

91. ハナサキガニ *Paralithodes brevipes*

(H. Milne Edwards and Lucas) 図版36

英名 spiny king crab, hanasaki crab

露名 コリュチイ クラブ
колючий краб

地方名(北海道) ハナサキ、コンブガニ(未成体*)、イソガニ(未成体)

漢字 はなさがに
花咲蟹

アイヌ語名 フレアンパヤヤブ

【形態】 甲は凸の字形で、甲や脚に多数の棘*がある。近縁のタラバガニ *Paralithodes camtschaticus* やアブラガニ *P. platypus* に比べ、甲の大きさに対して脚が短く、ずんぐりとした体形である。ふつう右の鉗脚*が大きいが、腹部は雄が三角形なのに対して、雌では丸みを帯びた左右不相称の扇形である。甲の背面は、生きている時は暗紫褐色や暗緑褐色を中心にオレンジ色や灰褐色が混じり、水色の小斑点が点在する。

熱を加えると鮮やかな朱色に変わり、このことから「花咲ガニ」の名前が付いたとの説もある。ごくまれに漁獲されて話題になる全身が青色のハナサ

キガニは、本来あるはずの色素を欠き、下地の青い色が浮き出て見えているらしい。

【生態】 千島列島、サハリン、シベリア沿岸、オホーツク海、カムチャツカ半島、ベーリング海に分布する。分布域はタラバガニ属* 3種* (タラバガニ、アブラガニ、ハナサキガニ) のなかで最も狭く、かつ沿岸近くの浅みにすむ傾向が強い。北海道周辺ではえりも岬から納沙布岬^{のきよぶ}にかけての太平洋と根室半島北側のオホーツク海に分布し、特に浜中湾から納沙布岬にかけての北海道東部太平洋沿岸に多い。

産卵は6～7月に沿岸域で行われる。産卵が近づくと、雄はつがいとなった雌のはさみの付け根を自分のはさみでつかみ、雌が産卵するまでの間、向かい合った状態を保つ。雌は脱皮*するとすぐに卵を産み出し、雄はそれに向けてすぐさま放精する。雄は生殖行動後に脱皮する。

雌の抱卵*個体は甲長* 8 cm台からみられるが、大部分は甲長 9 cm以上である。抱卵数*は甲長8.5～11.8cmの個体で約8,000～8万粒で、同じ甲長のものでばらつきは大きい。産卵直後の卵はオレンジ色であるが、発生が進むにつれて色素胞*が発達し黒褐色を帯びる。産卵した雌は約1年抱卵し、翌年の4～5月ごろに水深の浅い場所に移動して幼生*をふ化させ、数カ月後までに次の産卵を行う。

飼育試験では、甲長10～11cm、推定6歳の雌が4月に産卵し、10カ月後の翌年2月に1尾につき平均約1万5,000尾の幼生をふ化させた例が報告されている。

ふ化後の幼生は浮遊生活を送り、第1～3ゾエア*期とメガロバ*期を経て



上…青いハナサキガニ
左…ハナサキガニの第2齡稚ガニ

稚ガニになる。根室海域での各期への移行時期は、第1から第2ゾエア期が5月中旬以降、第2から第3ゾエア期が5～6月、第3ゾエア期からメガロパ期が6月以降と考えられる。メガロパ期から稚ガニ期への移行時期は、天然で6月下旬にメガロパが、7月下旬に第2齡*稚ガニが採集されていることから、6月下旬～7月と推定されている。第1齡稚ガニの甲長は幼生からの飼育から得たもので1.8～2.2mm。天然から採集された第2齡稚ガニの甲長は2.2～2.3mm。

自然と同じ水温条件で稚ガニを飼育すると、その年の12月ごろまでに7～9回脱皮して甲長8～10mmほどになるが、12月から翌年の5月ごろまでの期間はほとんど脱皮をしない。人工種苗*の標識放流*調査からも、冬の間は脱皮をしないことが確認されている。年間を通して水温を11～12℃に保って飼育すると冬の間も脱皮するため、脱皮の停止には水温の低下が影響していると考えられる。脱皮の回数は成長とともに減少し、甲長5cm前後のものでは年に2、3回、8cm以上で年1回となる。多くの雌が抱卵するようになる甲長9cm台になるまでに、ふ化後6～8年かかると推定される。その後は雄の方が雌よりも成長が良い。

甲長5mmから5cm程度になるまでの約3年間は、亜潮間帯*の岩礁^{がんしょう}地帯のくぼみや石の下に生息する。このころのカニはコンブガニやイソガニと呼ばれる。成長するに従って沖合に移動し、しだいに深い所に分布するようになる。甲長6～8cm程度のものは主に岸から水深30m程度に、9cm前後より



かごで漁獲されたハナサキガニ

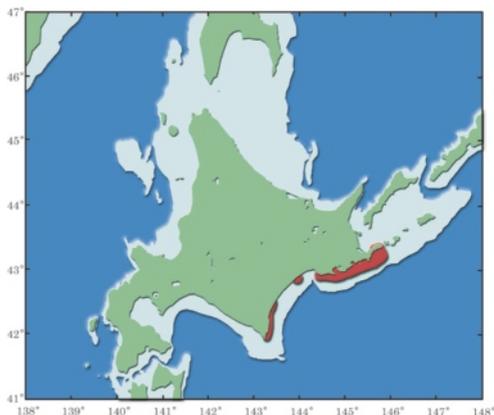
大きなものは主に水深20～190mに生息する。甲長8cmぐらいまでのものは、6～9月ごろに稚ガニの生息する亜潮間帯にまで入ってくることもあり、干潮時に干上がった岩の下やくぼみに取り残されたハナサキガニを見つけることができる。深みでは砂地の場所にも生息するが、その場合でも岩盤や根*の周辺に多く分布する。

沖合に移動するようになったものも、4～7月こ

るにかけては幼生のふ化や産卵のために接岸し、水深5mほどの所に密集することもある。

ハナサキガニの胃の中からは、コンブ類や石灰藻*などの海藻類を中心に、ヒドロ虫類、貝類、ゴカイ類*、甲殻類の脱皮殻、フジツボ、ヨコエビ類*、ウニ、ヒトデ、ナマコ類などの棘皮動物*などさまざまなものが見つかるので、生息場所にあるものであれば動植物にかかわらず何でも餌とするようだ。

ハナサキガニが集団を形成することは、ダイバーの観察や局所的な大量漁獲などからよく知られている。夜間に磯に行くと、浅い所に小さなものからほとんど成体*に近い大きさのものまで、数百尾のハナサキガニがひしめく場面に遭遇することがある。なぜこのような行動をとるのかは分かっていないが、この行動は満月の夜に観察されることが多いので、月齢や潮汐が関係しているのかも知れない。



北海道におけるハナサキガニの漁場